

都道府県別賞一等

わたしたちのくらしと生命保険

石川県 金沢大学附属中学校 一学年

倉 大遥

保険が誕生した国、イギリス。そのイギリスでは生命保険のことを「ラストラブレター」ということがある。亡くなられた方が愛する家族に送る最後のラブレターということのようだ。

生命保険とは死亡、治療、教育、老後の生活などに備える保険の総称だ。万が一の経済的ナリスクに備える。病気やケガ、扶養者の死亡などによる経済的な負担は、発生するタイミングが分からない。貯蓄だけではまかなえない部分のリスクに備えるのは難しいものだ。生命保険は貯蓄ではまかなえない部分のリスクに備えるものである。

また生命保険は、加入者同士の相互扶助によって成り立っている。多数の契約者が保険料を出し合うことで、加入者に万が一のことがあった場合に保障をうけとれるようになっていく。

生命保険は、生前に家族のことを想い、未来へと想いを託す。そして繋ぐ。生命保険というたった四文字には「未来へ繋げる想い」と「やさしさ」という大きい二つの感情が存在していると感じた。

二〇二四年一月一日午後四時十分、激しい揺れが続いた能登半島地震。元日ということもあり、多くの人が帰省していたであろう。一分前まであった日常がなくなった。数秒前までであった尊い命と笑顔は一瞬にして奪われた。

地震から三日後、帰省中に被災した方から父に電話があった。「こんなことになると思わなかった。隣にいた子供を守るために妻と二人でがれきの下敷きになった。子供は何とか無事だった。自分は自力でがれきの下から脱出したが、重傷を負い、ドクターヘリで搬送された。妻はまだがれきの下敷きになっている。一秒でも速く脱出してほしい。ただただ無事を祈っている。助けたかった。」と悔やんでいた。後日、奥様がお亡くなりになられたことを新聞によって知らされた。自宅に伺った際、悔やんでも悔やみきれない想いと奥様との思い出を語られた。そして奥様を思う気持ちに負けない奥様の家族への想いも実感していると話されたそうだ。

人生最後の瞬間に生命保険について考える人が果たしているのだろうか。保障について考える人はいるのか。人は死の間際、これまでの人生を振り返るように走馬灯を見ることがあると聞く。この現象はまだ多くのことが解明されていない。しかし、人間は極限の状態や感情が大きく動く際、何か神秘的ともいえることが脳内で起こっているのかもしれない。人生最後の瞬間、どんな光景が頭に浮かぶ

第62回中学生作文コンクール

のか。走馬灯のようによみがえった記憶は、その人にとって最も大切な人、大切なもの、愛した家族、美しい思い出であることを信じて。

人生のラストにふさわしいことを信じて。
想いよ届け。

「ラストラブレター。」